

2023 年度 公益社団法人乙訓青年会議所
理事長所信

公益社団法人乙訓青年会議所
理事長 上原 史明

はじめに

私たちは今、心の底から青年会議所運動に情熱を傾けられているだろうか。

終戦を迎えた我が国日本における青年会議所運動は、「新日本の再建は、我々青年の仕事である。あらためて述べる迄もなく、今日の日本の実情は極めて苦難に満ちている」という日本の再建を殊に思う同志が集い、「奉仕」「修練」「友情」の三信条のもと歩み始めました。そして、次代の担い手たる責任をもった青年としての正義感のもと、積極的に運動を展開し、やがてその運動は全国に広がりを見せ始めるなかで「今こそ我々は、郷土愛を再認識し、自らの研鑽を通じて友情を深め、明るい豊かな社会の建設に貢献しなければならない」という熱い想いと高い志をもった 14 名の青年によって、1978 年全国で 659 番目の青年会議所として乙訓青年会議所は誕生いたしました。以来、43 年の長きにわたり先輩諸兄姉が展開してこられた運動は、組織の誇りとして、連綿と受け継がれてきました。

時代と共に社会を取り巻く環境は大きく変化し、社会課題は日々多様化しているなか、現代における乙訓(まち)が抱える課題は、当時とは大きく変わっています。しかし、我々青年に与えられた使命は、いつの時代も変わることなく地域に貢献するリーダーとして、熱い想いと高い志をもち、「自分」ではなく「誰か」のために目の前の課題に果敢に立ち向かい、乙訓(まち)を明るい未来へと導くことであります。私たちは今、創始の頃のように人や乙訓(まち)を想う情熱をもっているだろうか。その情熱を原動力に変え、力強い運動を行っていると胸を張っていえるだろうか。まだまだ先行きが不透明な時代だからこそ志を同じくする青年が集い、英知と勇気と情熱を胸に、未来に誇れる情熱と希望に満ちた乙訓(まち)を創造してまいりましょう。

心を燃やせ！！ ～人を想い誇れる乙訓(まち)を創造しよう～

かつて、戦後の混乱期のなか、まちの明るい未来を願う熱い想いのもと立ち上がった青年たちのように、いつの時代も社会の中核を担っているのは能動的な青年です。それは決してできるからやってきたのではありません。できるかできないか、わからなくとも失敗をおそれず情熱的にまちの未来を想い挑戦したからこそ、多くの人の心を動かし、今日の青年会議所運動があるのではないのでしょうか。

2023 年度はスローガンに「心を燃やせ！！」を掲げ、「～人を想い誇れる乙訓(まち)を創造し

よう～」をテーマに活動いたします。「心を燃やせ！！」には、情熱こそ行動の原動力となり、自らを突き動かすだけでなく、その情熱はまるで炎のように燃え上がり、火の粉を飛ばして周りへ燃え広がる。つまり自らがまず、情熱をもって「誰かのために」と行動を起こすことでそれはやがて大きなムーブメントとなり多くの人を動かすことになるでしょう。また、「未来 Vision～5ヶ年活動計画～」の5年目の集大成として「まちと人が愛を実感できる乙訓の実現」に向けて多くの人を巻き込み、より大きな渦を作り出し運動を展開する必要があります。本気の情熱は物事を成功に導く力をもっています。誰かのために心を燃やし、全身全霊で「明るい豊かな社会」の実現に向け、未来を切り拓いてまいりましょう。

情熱をもって魅力溢れる乙訓(まち)を創造しよう

乙訓地域は、京都と大阪の中間に位置し、交通の利便性が高く、また、豊かな自然や多彩な伝統文化、多くの歴史遺産があるまちとして、様々な観点から見ても非常に魅力的な地域ではあるものの、その恵まれた地域資源を乙訓(まち)の発展へと活かしきれていない地域課題があります。京都府が打ち出す「もうひとつの京都」として乙訓地域は「竹の里・乙訓」と位置付けられており、アフターコロナにおいて、今後のインバウンドや観光産業への期待が高まるなか、大きな経済波及効果をもたらすポテンシャルは限りなく大きいと考えられます。地域の魅力を地域発展の糸口として活かしてこそ、初めてその魅力は地域資源となります。「モノ消費」から「コト消費」へと変化する社会経済のなかで、乙訓地域に存在する経営資源を、さらなる乙訓(まち)の発展につなげることが必要不可欠であります。まずは、様々なパートナーとの協力関係を築き、協働へとつなげる機会を創出いたします。そして、乙訓(まち)の可能性をさらに広げるために、SDGsの指標を軸に地域資源を活用した循環経済を推進いたします。さらに、地域のリーダーとしてまちづくりへの当事者意識を醸成し、地域の発展に向け乙訓(まち)の可能性を再認識して頂きます。また、乙訓(まち)に地域愛を波及させるために、乙訓(まち)の地域経済や地域コミュニティの活性化につなげます。そして、まちづくりには当事者意識をもった市民の参画が必要であり、未来の政策を認識することで、自身の住み暮らすまちの未来への関心を高めます。

様々な地域資源を活かしたまちづくりにおいて、試行錯誤を繰り返したイノベーションの創出こそが新たな価値創造や地域課題の解決に結びつくと考えます。地域を牽引するリーダーとして我々自身が情熱をもってまちづくりに関わり、魅力溢れる乙訓(まち)を創造してまいりましょう。

情熱的な人づくりから乙訓(まち)の発展につなげよう

人は誰も自分の利を求めて動く。それは人間本性の議論に沿って古くから論じられてきています。だがその「自分さえよければいい」という思考こそが、今日の世界的に痛ましい環境問題や毎日のようにニュースで報じられる悲しいできごとの因果であることは認めざるを得ない事

実であります。これは企業活動や人と人との関わり合いのなかでも同じことがいえます。目先の利益だけを求める企業は、世間からは淘汰されることでしょう。自身の損得だけを考え行動する人は、やがて協力者はいなくなるでしょう。一方、人を想い、乙訓(まち)を想う心をもつことで、周囲の協力を得ることもでき、社会も組織も進むべき方向へ前進することができます。いつの時代も変わらず必要とされている、利他の心を我々乙訓(まち)のリーダーが率先して行動に移すだけではなく、子供たちに伝え、未来に種を蒔き、継続的な乙訓(まち)の発展につなげることも、我々の使命であります。まずは、近隣の青年会議所との関わり合いのなかで、他を想う心を養うと共に、地域の枠を超えた絆の構築につなげます。そして、乙訓青年会議所の創立を祝う場において、創立を祝うだけではなく、運動の原点に立ち返り、利他の心を改めて認識する機会を創出いたします。さらに、利他の心をもつことの重要性や、利他の心が人生にもたらす変化について理解して頂きます。また、未来を担う次世代にも「誰かのため」に率先して行動する心を養い、他者との協働を実体験できる機会を創出いたします。そして、卒業を迎えるメンバーの、他者を想い活動してきた軌跡をたどり、組織の好循環につなげると共に、メンバー同士が互いに感謝し敬う精神をもって、次代に情熱の灯火を絶やすことなくつなげて頂きます。

青年会議所活動を通して、利他の心を養うことで、魅力的な人財へと成長することができます。そんな魅力ある組織だからこそ、我々が貴重な時間とお金を掛けてでも青年会議所に集う価値があるはずです。そして、利他の心を次代に伝えていくことで、理想とする人づくりにつながり、その先にある真に誇れる地域づくりへの礎になると私は確信しています。

情熱をもって仲間を増やし、熱い想いを次代につなげよう

昨今、コロナ禍による不安定な社会情勢のなか、全国的に会員拡大は難しい状況下に置かれており、その結果、会員数の減少はおろか、消滅する LOM が後を絶たず、その事実は決して先送りにはならない喫緊の問題であります。乙訓青年会議所でもここ 10 年間で見ると、会員数は約半数となっており、我々が行う運動の本質でもある、乙訓(まち)に与える影響力の低下や会員自身の学びの機会が減少していることはいうまでもありません。乙訓(まち)の発展に寄与する組織として、会員拡大こそが運動の根源であることを今一度理解し、会員一人ひとりがこの危機的状況と真摯に向き合い、会員拡大を推し進めていく必要があります。組織の存続や運営のための会員拡大も必要ですが、それだけではなく、明るい豊かな社会を築くため、これからの乙訓(まち)の未来を本気で考え、共に行動できる同志を見つけることが必要です。そのためにも並々ならぬ情熱と行動力を兼ね備え、綿密な戦略を立てた、会員拡大を実践していかなければなりません。まずは、定めた目標数値達成に向けて、1 年間を通した戦略的な拡大計画を策定することで効率的かつ効果的な拡大運動につなげます。そして、メンバー一人ひとりが会員拡大活動に対してポジティブな動機付けができるようにいたします。さらに、メンバーのさらなる拡大意識の醸成につなげるために、途中経過を検証する場を設けます。また、共に志を立てた新たな仲間には、組織の理念や活動意義への共感を情熱に変え、組織のさらなる発

展へとつなげて頂きます。

伝える側が拡大の意義を理解していなければ求心力は生まれません。拡大運動とは、決して入会だけが目的ではなく、メンバーが青年会議所を熱く語れるように成長すること、すなわち次代に青年会議所運動を伝えていける好循環を生むことが真の会員拡大につながると考えます。組織の魅力を熱く語れる人間であれば、自ずと説得力が身に付いているはずで、実体験をもとに魅力を熱く語れば心は必ず動いてくれると私は確信しています。

情熱的な組織運営で組織の基盤を強固なものにしよう

乙訓青年会議所は公益社団法人として、地域に根差した運動を展開するうえで、公益性の確保とコンプライアンスの遵守は必ず守らなければならないルールの一つでもあります。近年の在籍年数の短期化ゆえに、経験年数の浅いメンバーが役職を担うなか、組織の継続的な発展のためには定款や守るべきルールを徹底してメンバーに浸透させ、乙訓(まち)に影響を与えられる運動を展開し、市民からの付託と信頼に応え続ける必要があります。「在籍年数の短期化」という課題を組織の転換期として前向きに捉え、先輩諸兄姉から受け継がれてきた、守るべきものはしっかりと引き継ぎ、時代と共に変えるべきところは柔軟に変化できる組織へと導いていかなければなりません。まずは、役職者が、青年会議所での様々な決まり事や約束事を徹底して守れる環境を構築すると共に、青年会議所としての会議の重要性を理解して頂きます。そして、京都ブロック協議会との連携を、組織の活性化へとつなげて頂きます。さらに、地域により大きなインパクトを与える事業を行うための、プロセスについて学ぶ機会を創出いたします。また、1年間の集大成として、我々の運動の成果を実感して、共に切磋琢磨したメンバーに敬意を表し、我々の運動を次代に継承いたします。そして、青年会議所として、透明性をもった財務処理と、会議における「約束事」、「決まり事」を再度認識し、濃密で実り多い会議を実現してまいります。

今一度、公益社団法人としての使命と社会的責任を自覚したうえで、効率的な会議運営を行っていかなければなりません。組織として守らなければならないルールを徹底し、厳しくも柔軟に、妥協しない組織運営を行い、今の時代に答え得る組織を目指してまいりましょう。

情熱的な想いを持続的な乙訓(まち)の発展につなげよう

今年度、乙訓青年会議所では2019年に策定された中期ビジョンである「未来 Vision～5ヶ年活動計画～」の5年目を迎えます。新たな5年の方向性を示すために、中期ビジョンの最終年度として5年間の活動を振り返り、検証していかなければなりません。そして、次年度には創立45周年を迎えることから、連綿と受け継がれてきたまちづくりへの熱い想いを胸に、記念すべき年を先輩諸兄姉やこれまで関わりをもってきた多くの人びとと共に称え合い、祝うことのできる記念となる事業の準備を進める必要があります。また、メンバーが感謝の気持ちをもって周年

事業に臨むために、次年度に控える周年事業の意味合いや詳細を説明し、周年事業の周知につなげる機会を創出いたします。

英知と勇気を兼ね備えた情熱をもった青年として乙訓(まち)の明るい未来を創造するため、結果を恐れず行動することが青年会議所の存在意義そのものです。明るい豊かな乙訓(まち)の実現に向けて今一度、我々が為すべきことを考え、未来への礎を築いてまいりましょう。

情熱的なリーダーシップで組織を牽引しよう

青年会議所では、各役職に明確な役割があり、組織の理念や目的を組織図の縦割りのなかで、スムーズに伝えることができるというヒエラルキー組織のメリットがあります。しかし、トップダウンによる伝達では、組織固有の考えばかり伝わりすぎてしまうデメリットがあります。その結果、固定観念にとらわれ、新たな発想が生まれにくく、硬直した組織を作りかねません。その双方を理解したうえで、正副役員は組織の理念に沿った目的達成に向け、「誰のために」「何のために」事業を行うのかを明確に示し、今の時代に本当に必要とする運動を柔軟な発想をもって具現化するためのサポートを行う必要があります。その行動こそがメンバーの成長と発展の機会となり、強固な組織づくりへとつながると考えます。そして、普段関りが少ない会員同士の新たな交流から生まれる絆を情熱のエネルギーに変換し、組織に好循環を生み出す能動的な行動につなげます。

偉いわけでも何でもありません。役職は役割と責任。相手を思うからこそ本気でぶつかる。それはその相手を心から信頼しているからこそできること。否定する意見ではなく新たな発想を尊重し、組織の可能性を広げ、まだ見ぬ未来に導いてまいりましょう。

むすびに

組織が時代と共に変わらなくてはならない理由は、変化する社会にあっても「変わらない価値」を守るためです。今までの当たり前が当たり前ではなくなった今、「守る」ために「変わる」ことが必要であり、先輩諸兄姉が43年間つないでこられた灯火を決して絶やすことなく、乙訓青年会議所の「変わらない価値」を守るために、変化を恐れず情熱的で斬新な挑戦を行っていくことが我々に与えられた責務であります。

多くの人に支えられ、今活動できていることに心からの感謝を抱き、「誰かのため」に心を燃やし、共に乙訓(まち)の明るい未来を切り拓いてまいりましょう。

情熱をもつ1人は、情熱をもたない100人に勝る。

情熱をもって努力を続ければ、今日不可能なことも明日は実現できる。

今を生きる青年として、心を燃やせ。

できるかできないかじゃない。誰かのためにとことんやるんや。